

ヴェリンダー嬢は美しいのか

針 生 進

ヴェリンダー家の一人娘レイチェルはそれほど美しいのか。同家のヨークシャーの邸宅の執事ゲイブリエル・ベタレッジによる説明も100%の称賛とはいえません。

お嬢さまは、この6月21日で18歳になられる。黒い髪に黒い瞳の女性（聞けば、最近、社交界では流行らなくなつたらしいが）がお好みで、背丈の高い低いに特に選り好みがないければ、レイチェルお嬢さまほど美しいお方はまだご覧になってはいないはずと断言できる。小柄で細身とはいえ、頭の前からつま先まで、何とも均整のとれたお体なのだ。座られる、立たれる、そしてとりわけ歩かれるお嬢さまを目にするだけで、見る目のある男性ならば、お嬢さまの優美さとは（こんな言い方が許されるなら）お体そのものの優雅さなのであって、着ておられる服のそれではないと納得されるだろう。これほどに濃い黒髪の方はいない。お目の色もお髪に合っておられる。お鼻は特に立派とはいえないと認めなければならぬ。お口とあごは（フランクリンさまのお言葉を借りれば）異教の神さまなら一口ほどのおつまみといったところ。お顔の色は（やはりフランクリンさまの反駁の余地がないお言葉でなら）陽の光そのものように暖かい。いつ見ても輝いていらっしやるのであれば、日暮れには衰える太陽にも勝るわけだ。さらに付け加えるなら、颯爽と、活力にあふれ、お育ちのよさを表して、いつも投げ矢のように背筋を伸ばしていらっしやる。!

髪の色、目の色と身長にかかわる二つの条件を加えてはじめて、「美しい」という形容詞が使われます。「小柄で細身とはいえ」と譲歩してから、その端正な容姿について述べはじめられます。ここで描かれるのは、語り手自身の好みにはそれほど合致しない女性像なのです。「社交界では流行らなくなったらしい」と髪や目の色についてつけ加えるのは、一致しないその差から思わずもれた一言かもしれません。伝聞の、社交界などに縁のない彼から聞けばそれだけ当てにならない情報であるだけでなく、奉公先のお嬢さまに対しては遠慮を欠いた註釈にもなるからです（彼なりに遠慮してそのなかに入れてはいるけれど、カッコは強調記号になる場合もあるのです）。彼の目をより楽しませるのは、例えば、お屋敷の使用人の一人ナンシーです。彼女の耳をつまむのも、「あれは可愛い、はじけんばかりに肉づきのよい娘であって、ある娘を好ましく思っていることを表す、いつもの私のやり方なのだ」（33）。後に登場する、漁師の娘で松葉杖をつくるルーシー・ヨーランドの美しさについて述べるときにも、次のような但し書きをつける彼なのです。「あの娘の悪い脚と痩せた体（後者の方が女には大きな欠点と私には思える）に目をつぶれば」（190）。このような嗜好は、『夫と妻』の無名で三人称を使う語り手の批判的になります。「女性美について英国人が抱く平均的な価値観を、ごく簡単な言葉で要約してみれば、三つの単語にまとめられるだろう——若さ、健やかさ、ふくよかさ、である。知性とか快活さなどのより内面から生まれる魅力、体の線が描く繊細さとか、面立ちの細部の端正さなどの精妙な魅力、これらをこの島国の男たちはほとんど求めていず、評価することもまれなのだ」²。ベタレッジのような執事は「どこを捜してもいそうにない」かもしれません。³ それでも、特権階級の令嬢の並みはずれた美しさを評価するには、彼の目は確かに世間並みにすぎるようです。お気に入りのナンシーについて彼にさらに言わせれば、「機嫌がいいときのこの娘は可愛い。可愛いと思えば、私はそのあごの下をくすぐってやる。何もいやらしい気持ちでそうするわけじゃない、いつもの習慣にすぎないのだ」（34）。この後半は、少し苦しい言い訳にも聞こえます。「てっとり早く女を慰めてやろうとする

なら、膝に抱きあげてやればいい」(37) という口実で、耳たぶやあごにふれるだけでなく、若い小間使を膝に乗せようともする彼なのです。それでも、令嬢の「お体そのもの」に言及するときの語り手には、『白衣の女』のなかでメリアン・ハルカムの後ろ姿を、やはり服を透視するように見つめるフォスコほどの好色な、あるいは同じ後姿に見とれるハートライトのような熱い視線はなさそうです。⁴ レイチェルさまとは、他の誰でもない、実家のハーンカスル家からつき従ってきて50年にもなる敬愛すべきヴェリンダー夫人の愛娘であるからです。加えて、彼個人の美感に訴えるには優雅にすぎる顔立ちと体形の持ち主でもあるからです。お嬢さまを描写するのに、彼女の従兄にして幼なじみのフランクリン・ブレイクの表現を借りてくるのは、自分には称賛するに十分な表現能力が足りないからというよりも（一つは回りくどく、もう一つは陳腐な比喻から見れば、フランクリンもそのような能力に十分恵まれてはいないようだけれど）、自ら言葉を選んでまでも称賛しようとする情熱に欠けているからです。

冒頭にあげた引用文は、異性を眺めまわす男性の視線ばかりか、男性読者を想定しての観察であることも隠そうとしていません。「見る目のある男性ならば」と言及されていない場合でも、「……がお好みで」や「……に選り好みがあれば」などは、明らかに語り手と同性の読者へ呼びかけられています。大切なお嬢さまをあまりに男性のための鑑賞物に仕立てるのは非礼ではないか。この非難に対しては、レイチェル嬢とは、語り手にとってまさに鑑賞するしかない、ふれるのも許されない存在だからだと語り手を弁護できます（鑑賞物以上ではないとの見方もまた礼を欠くのでは、という議論はおくとして）。従妹の誕生日の宴に出席するためヴェリンダー一家に到着した、レイチェルとは対照をなす髪や目、肌の色、身長、体形のエイブルホワイト家の令嬢たちにこそ彼は魅了されます。「お兄さまと変わらないほど大柄で、活発で、金髪、バラ色に輝く、はち切れんばかりに肉付きのよい、あふれんばかりにお元気なお嬢さまたちだった」(72)。とはいえ、「彼女たちを乗せて、馬もかわいそうに脚を震わせていた」(同)と細かい観察をして、肉

づきが少しよすぎるのを指摘するのは、負け惜しみとも思えます。体型はナンシーに似ているとしても、ご主人の実妹エイブルホワイト令夫人の娘である彼女たちもまた、たとえ耳たぶでさえ、小間使にそうするには、ふれるなどかなわない存在だからです。

ベタレッジが使う「優美」という賛辞には含意が読みとれます。自分の美感にに応じてくれる体型とは異なるレイチェルへのその評言は、お屋敷の使用人としての自分と雇い主の令嬢である彼女とを隔てる距離を測りもするのです。次のような観察を、自分の語りのなかに、少し唐突気味に挿入する語り手が自らとる距離をです。

上流を往く方々の人生航路の行く手には、何とも厄介なことに、岩礁のような危険が立ちだかっている。怠惰という危険である。こういう人々の日々の生活は、何かすることはないと捜し回ることに専ら費やされてきて、その結果、外聞をはばかりような気晴らしに、やみくもにのめりこんでいくことがいかに多いか、見ていて理解に苦しむ。十中、八九は、誰かを苦しい目にあわせたり、何かを台無しにしたりしては面白がっているのだ。ご本人はそれで教養を積んだと信じて疑わないのだが、本当のところは、家のなかをめっちゃめっちゃにしたにすぎない。(62)

女性を見る自分の「平均的な」目を疑いなどしないように、自分の「平均的な」生活にも、ベタレッジは何の不満もありません。「そう、こうして私なりに恵まれた暮らしをしていた。……これ以上、どんな幸福を望めるというのか」(24)。不満はむしろ、自分より上の階層の人たちの暮らしぶりの一端に向けられます。上に引いた一節は、その暮らしぶりに言寄せて、これからの事件の展開を予告してもいるのです。血ぬられた来歴をもつ宝石にかかわることで、レイチェルも含めた複数の登場人物が、「誰かを苦しい目にあわせたり」、自らの人生を「台無しにしたり」、家庭崩壊さえも招くのです。それもこれも、生活の安定を図るための苦労などとは縁のない彼らの空騒ぎ

の果てではないかという、語り手の距離をおいた視線が上の引用からうかがえるのです。レイチェルとベタレッジが直接に言葉を交わす場面は、小説全体を通じてごくわずかです。それも、その所有者と同様に確かに美しい鑑賞物であることは認めるとしても、後者には何の関わりもない宝石のことで前者の方から呼びかける機会に限られています。一度目は、その宝石を見てごらんと誘い、二度目は、その宝石が消えてしまったと訴えるときにです。どちらにもベタレッジは、意味ある応答などできるはずもないのです。「この家ほど幸せな家庭は英国にはないと思った。それが今はどうだ、散りぢりになり、まとまりなど見る影もない—— 謎と疑心暗鬼で、暖かだった家庭の雰囲気はすっかり毒されてしまった」(188)。ベタレッジの口ぶりを借りてきたようなこのフランクリンの嘆きは、この家族の血縁者である本人こそがその離散を引き起こした元凶だと後に判明するのであれば、二重に嘆かわしくなります。身を引いてはいても、自分たち雇われ人側にも雇い主側の「気晴らし」の被害がふりかかるとき、老執事の苦言はさらに苦くなります。「あの呪われたムーンストーンは、われわれの暮らしをすっかりかき乱してしまった」(傍点筆者)(93)。フランクリンとベタレッジの二人では宝石盗難事件の意味合いは異なります。前者にとっては、恋人との絶縁という心痛をもたらす、しかし、大きく迂回しながらも結局は彼女との結婚に収まる冒険、まさに「人生の日々の連続から脱落している」冒険なら、⁵ 後者には、同じ奉公人仲間の一人の自殺にまでいたる取り返しのつかない悲劇、恐れも哀れみも備えた悲劇をもたらすのです。境を接しながらもたがいに相容れない、交流、融合など考えられない二つの世界——これを『白衣の女』が、結婚と血縁を通じて一つの邸宅に暮らすことになる、堅忍不拔の善と矯正不能な悪として描いているなら、『ムーンストーン』は、同じ屋敷に同居する二つの階級——主従関係で結ばれながらも、価値観、世界観を異にする二つの領域として設定しています。語り手ベタレッジは、事件の経過を追うだけでなく、自分が属する領域内での視点を折りあるごとに表明しているのです。親切なご主人の日頃の思いやりに感謝こそすれ、自分に与えられた

身分と職分に、ヴェリンダー家の執事は何の疑いもはさみません。その彼でさえ、上にあげたような、あるいは次のような非難をあえてその報告に残しておくのです。その報告を、雇い主側のフランクリンが後に読むのを承知の上です。「あんなダイヤモンドなんか、お屋敷にやってこなければよかったんだ！」(149)。宝石を主語にすることで、その宝石を持ち込んだ当人であるフランクリンへのあからさまな批判を語り手はかろうじて抑えているのです。

レイチェル嬢はそれほど美しいのか。月の光にも似た輝きを誇る宝石の中心部に傷があるなら、それが贈られた、太陽にもたとえられる彼女にも、その美しさを損ないかねないほどの欠点があるとベタレッジはつけ加えなければなりません。

真面目な話、レイチェルお嬢さまには、多くの美点と魅力がありながらも、一つの欠点があった——公平に見て、そう言わざるをえないのだ。同じ年頃の娘たちには似ず、ご自身のお考えというものをもっておられて、それに合わないのであれば、当世の流行なども頭から馬鹿にして無視されるような頑なさをもっておられた。倍ほどの年齢の女性でもまずそうはしないだろうが、何事もご自分一人で決められた。他人に助言を求めず、これからなさろうとすることを前もって話されもしなかった。お母さまにでも誰にでも、隠し事を打ち明けるということもなかった。(65)

ここで語り手は、「公平に見て」などいません。自分なりの女性観を当然のものとして疑いもしない彼であれば、お嬢さまの性格の一面を自主性なり独立心として認めるわけにはいかないのです。⁶ 彼女と比較するために引き合いに出される「同じ年頃の娘たち」、そして「倍ほどの年齢の女性」も、自分の目や手の届く狭い範囲だけから採られた、一般論を導き出すにはあまりに限られた実例です。しかし、それ以上に広い視野を彼に求めるのは「な

いものねだり」です。むしろ上の発言を裏返せば現れる、その狭い視界が許すかぎりでレイチェルを一人の娘として「公平に見て」いる、お嬢さまをお嬢さまとして特別視せず、階級差などにはとらわれずに眺めている語り手を認めるべきかもしれません。それでもやはり、お嬢さまの内心をのぞけというのは無理な要求になります——彼にも、他の誰にもです。「お嬢さまについて存じあげている事々をご紹介しますとしよう。そうしておいて、お嬢さまのお心の内の探究は読者の方々にお任せしよう——もしおできになればだが」(64)。

宝石の行方と同じほど、あるいはそれ以上の謎となるのは、宝石紛失発覚直後からのレイチェルの不可解にも頑なな言動です。警察への捜査協力を拒絶するのです。そのために、被害者である彼女本人にも嫌疑がかけられるほどです。それでもなお弁明を拒否しつづけます。そうしたのも、後に彼女自ら打ち明けているように、自分だけがその現場を目撃した恋人の犯行を隠し、彼の名誉と自分の誇りを守るためには、仕方のない、他にとりようのない選択、愛情と憎しみ、自尊心と不信感の間で揺れた果てでの選択だったのです。カフ部長刑事を前にして、レイチェルがフランクリンを強く非難する次の場面の時点では、バタレッジはそのような動機など知る由もありません。

フランクリンさまへの、かつて見たこともない敵意を一気に爆発させて、このような言葉を、意地悪気に、激しい口調でおっしゃったので——お誕生のときから存じ上げ、わがヴェリンダー夫人の次に敬愛するお方とはいえ——わが生涯ではじめて、レイチェルさまを恥ずかしく思った。(111)

今までの沈黙と拒絶に代わって、ここで糾弾と攻撃で守ろうとしているのが、今まさに彼女が敵意を向けている相手に他ならないことなど、この語り手は知るはずもないのです。「恥ずかしく」思わせるような態度をなぜお嬢さまがとるのかと疑う以前に、その態度そのものに衝撃をうける語り手なの

です。

彼がここで耐え難く思うのは、お嬢さま個人の気質の一面に加えて、名家の令嬢たる彼女に与えられているとして、次のように説明される特権の一つにもなります（フランクリンをなじった後でレイチェルが引きこもった寝室からは、彼女の泣き声が聞こえてきたと報告されています）。

身分の高い方々は、あらゆる贅沢に身をゆだねることができる。とりわけ、ご自分たちの喜怒哀楽に浸りきるという贅沢にだ。下々の者には「余儀なき務め」というものがあり、そんなものなしで暮らしていける人たちとは違い、これは、われわれには何の容赦もしてはくれない。自分の感情など表に出さないように習い努め、辛抱を重ね、こつこつとその日その日の務めを果たしていく他はない。何も不平を並べているわけではない。ただ、そういうものと気づいているだけの話だ。（167－8）

こう語る本人が確かに、情動に身をまかせると排するように努めていることは、彼の私生活からも明らかです。セリーナ・ゴビイを妻に選んだのも、彼女が「食べ物をよく噛み、歩くときには大地をしっかりと踏みしめる」（24）からであり、自分の家の使用人だった彼女をめとれば、「節約第一——それにちょっぴりの愛情」（同）という二つの要件が同時にかないもするからです。妻の早死についても、それが夫婦仲が少しぎこちなくなってきた頃のことだったために、「全能の神さまが、女房をお召しになり、われわれ二人を救ってくれた」（25）と解釈しています。「すぐに夕食に行くんだ。お腹がすいているから、そんなことを考えるんだ」（38）——これが、かなわぬ片恋に思い悩み、死の誘惑に負けそうにもなるロザンナにかける言葉です。「煽情小説」の一つにも区分されるこの小説が扱う出来事を、その特徴に即して報告するには、情動の浪費や暴走を避けようとするベタレッジはふさわしい語り手ではありません。語り手としての彼の役割は、自分の肩越しに事件を眺める読者の感情をいたずらに刺激するよりむしろ、登場人物たちへの

読者の感情移入の調整機能を果たすことなのです（実際、フランクリンに、レイチェルに、ロザンナに、あるいはカフ部長刑事に対する彼の反応は、共感と反感の間でゆれ動いています）。そのような彼の視界のなかでは、激情の嵐に翻弄されるレイチェルは、優美さの理想像から落ちた偶像に変わらざるをえないのです（お嬢さまに僭越にもに批判を加えるのは、頑なに自分だけを信じ頼むことが、常に正しい方向に進むことにはならないと彼女も思い知らされるという、これからの事件の展開をすでに知る彼からのひそかな警告なのかもしれません。ひそかな、というのも、事件の成り行きを先取りして口走るなど、彼はほとんどしていない—— そうでなければ、日付のある文章を書く意义がありません—— からです）。

ベタレッジとレイチェルの間の隔たりは、それでも、彼の後をうけて物語を語り継ぐドゥルシーラ・クラックとレイチェルとの距離に比べれば、はるかに狭まります。血縁関係（クラックは故ジョン・ヴェリンダー卿の姪にあたります）にありながら、遠慮を知らない彼女の言葉使いが二人の間をさらに遠くしています。

レイチェルを見る度に、こんな薄っぺらな娘が、あのジョン・ヴェリンダー卿夫妻のような、気品のあるご両親の間の子供だなんてと思わずにはいられなくなる。とはいっても、今このとき、彼女は私をがっかりさせただけではない—— まさに驚かせたのだ。言葉使いと振る舞いにお嬢さまらしい慎みなど影ほどもなく、見ているだけでも腹立たしいほどだった。(209)

もちろんこの語り手の視点は、令嬢という身分を享受する従妹への敵意・嫉妬心と、彼女の従兄にして求婚者のゴドフリー・エイブルホワイトへの羨望、というより性的関心、あるいは性的妄想との狭い間を行き来しています。「かけがえのない、立派なわが友」(203) ゴドフリーの手をとるレイチェルのそれを「良家の令嬢らしからぬ、行き過ぎた振る舞い」(217) と断じる嫉妬

心と、彼が自分の手を取り、それに唇を与えてくれると、露骨なまでの興奮状態——「ああ、何という恍惚、純粹で、この世のものとも思われぬ恍惚の瞬間！」(220)——に高まる関心との間にです。そのために、かえってレイチェルの「お嬢さまらしい慎み」を引き立たせてしまう場合さえあります。ヴェリンドー夫人の死後、エイブルホワイト家に身を寄せているレイチェルをクラックが訪れる次の場面でのように。

部屋に入っていくと、とても驚いたことに、レイチェルは立ち上がり、片手を差しのべて迎えてくれた。「ようこそ」と彼女は言った。「ドゥルシーラ、常日ごろは、あなたには愚かなことや、失礼なことばかり申し上げてきました。申しわけなく思います。許していただきますね」(250)

上に引用したような、自分の予想を裏切り、冷静にも礼になかったレイチェルの対応を書き記しておく、あるいは逆に、「この凶々しい狂信者」(266)、「この無礼なオールドミス」(267)など、自分を名指す悪しざまな言葉さえ書き残しておく限りでは、クラック嬢は確かに「信頼できる語り手」です。⁷この回想をしたためるようにフランクリンから依頼された時点で、レイチェルが依頼主の愛妻となっているのをこの書き手は承知しています。承知しながらも、現在のフランクリン・ブレイク夫人に対して、辛らつな筆使いを控えないのは、意地悪な動機からだけでなく、率直な傍観者の視線を忘れないでいようとする姿勢にも見えます(それを受け取る側も、他の語り手のそれと変わりなく、「彼女の原稿に関しては、追加、変更、削除などは一切行わない」(202)と確約しています。あえてそう付け加えるのには、追加、変更、削除したいこと、すべきことが多々あるとの言外の意味も察せられますが)。それでも、彼女もまた、ベタレッジと同様に、レイチェルの不審な行動の理由や動機を知らないし、知ろうともしていません。一方、レイチェルにも、クラックという存在そのものさえ拒絶する時が来ます。「あの人と同じ空気

を吸うなんて息がつまってしまいます。二人で同じ部屋にいたと思っただけでぞっとします」(170)。読者が最後に見るクラックが、布教活動家としても、ヴェリンダー家の血縁者の一人としても、誰の理解もえられないまま、「みんなからののしられ、みんなから見捨てられた」(271) 姿であるなら、彼女の手記のなかに最後に現れるレイチェルも、「いつも、どんなことにも、つむじ曲がり、やること、なすこと、いつも気まぐれで、訳の分からない」(268) 生意気な小娘にとどまるしかないのです(もっとも、語り手としてのクラックの役割は、少なくともフランクリンが要求しているそれは、当時のレイチェルの周辺の事情を思い出せる限りで詳らかにする以上に、レイチェル本人についての感想を述べることではないのですが)。

クラックの次に語り手を引き継ぐヴェリンダー家の顧問弁護士であるブラフは、レイチェル側からの証人の一人です。ほとんどベタレッジの言い回しそのままにはじめながら、クラックの意見にもうなづいてみせながら、彼らとは異なるレイチェル擁護論を導きます。

あの子にも欠点があることは認めよう —— 自分というものを見せようとはしないし、片意地でもある。一風変わったところがあり、奔放でもある。同じ年頃の娘たちとも違っている。しかし、鋼のように誠実、高潔であり、寛大すぎるほど寛大でもある。もし明々白々な証拠がある方向を示していて、レイチェルの言葉だけが別の方向を示しているのなら、その証拠よりも、あの子の言葉の方を私は支持するだろう。たとえこの身は法律家であるとしても！(226)

さらに再び、「これほどに徹底した自立心は、男子にあっては大いに褒めべき美德である。女子にあっては……大いに欠点となる」(278) としてベタレッジに同意したすぐその後で、次のように断言もします。「ただレイチェルの場合だけは別だ。私の見るかぎり、他の誰でもない彼女の性格において自立心とは、彼女の美德の一つなのだ」(同)。他方、レイチェルの容貌につ

いて、彼はことさらに言及してはいません。あらためて言いたるまでもない事柄だからであり、たとえ褒め言葉を重ねるとしても、自分の雇い主のお嬢さまの姿形を云々するのは礼を失するとわきまえてもいるからかもしれません。それでも、レイチェルの気質・性格を認め、最大限に評価する彼ならば、やはり最上級の形容詞を使って、レイチェルの（18歳の誕生日を迎えて間もないけれど）異性としての魅力に一言ふれざるをえないのです。求婚者のゴドフリーの底意を教えると、「彼女は急に私の方を見上げた、もっと幸せだったころの微笑——女性の顔にうかぶのを見たなかで最も抗いがたく魅せられる微笑——のかすかな面影をうかべて」（279）。この一文だけでも、現在の彼女をおおう暗雲が晴れるなら、レイチェル本来の明るさがいかに輝くかを読者に伝えるには十分なのです。

ゴドフリー・エイブルホワイトも、レイチェルの外見に特に目を向けてはいません。ブラフのように礼儀上の理由からではありません。クラック嬢のように悪口をくり返したりなどももちろんしていません。ただ無視するのです。宝石だけでなく、彼はその持ち主をも盗もうとします。異性としての魅力にかられてではありません。彼女の容姿の美しさなど、この求婚者にとっては、結婚という契約が夫たる自分に与えてくれるだろう豊かな財源の魅力に比べれば、ほとんど取るに足らない問題なのです（レイチェルから婚約を解消されると、すぐにも彼は、莫大な遺産を受け取る見込みのある別の若い婦人に求婚を試みます——それもまた破談に終わるのですが）。レイチェルの容色に一度も言及していないわけではありません。従妹への二度目の求婚が断わられて述懐するには、「美しい女性、すぐれて高い社会的地位、そして相当の収入、これらを失ったのです」（258）。三つの失われたものの順位は、しかし、本人の本音とは逆のはずです——本音というものを、小説全編を通じて、彼はほとんど語らないとしても（語っていたのなら、推理小説としてのこの小説は成り立たなくなりますが）。ある未成年の縁者の財産管理人として自分に委託された2万ポンドを、豪華な家具調度を備えた別邸と、そこに囲う愛人のために使い果たしてしまい、その信託権が切れるのも間近に

迫っている、それなのに、最後の頼みの父親への融資の申し込みさえ拒絶されてしまった——このような窮地に陥っていた当時のゴドフリーの本心ではないはずです。「相当な収入」こそまず第一に、そして早急に手中におさめたいのであり、「美しい女性」など、その後につづけばいい、あるいは、つづかなくてもかまわない——これが偽りのないところなのです。

小説が3分の2を過ぎてからも、レイチェルの美貌について読者を迷わすような証言が聞こえてきます。貧しさから悪行を重ねた後、感化院から出て、行くあてもないところを、女主人によってヴェリンダー邸の使用人として引き取られたロザンナ・スピアマンの告白からです。フランクリン・ブレイク宛ての恋文にして遺書のなかで彼女が記すには、

もしお嬢さまが、あなたが思うように、本当におきれいななら、まだ我慢もできたでしょう。いいえ、だめです。そうだとしたら、なおさらお恨みしていたに違いありません。レイチェルお嬢さまに召使のお仕着せを着けさせ、装飾品など取り去ってしまったらどうでしょう——こんなことを書きつらねても、何の意味があるのかわかりませんけれど。お嬢さまの体つきのよくないことは否定できません。だって痩せすぎていますもの。でも男の人はどんな女性がお好みかなんてわかりませんが。召使いのこちらが、お務めを辞めねばならなくなるような振る舞いを見せるお嬢さま方だっておられるのです。私には関わりのないことですが。こんな風を書いてみても、この手紙を読んでもらえるなどと思っはけません。でも、レイチェルさまが美しいなどと言われるのを耳にしますと、しゃくにさわるのです。着ていられる服が、そしてお嬢さまとしての自信がそう見せているだけだとわかっているからです。(318)

仮定法を使って抑えられていた口調のすぐ後から、強い——前科のある自分をあえて雇い入れてくれたご主人のお嬢さまについて使うには強すぎる否定と断定が追いかけてきます。レイチェル本人の体の線の美しさと着てい

る服のそれとを区別するのは、ベタレッジと同じ発想です。そこからこの書き手は正反対の見解を導くのです。「お嬢さまの体つきのよくないことは否定できません」。ベタレッジが「優雅さ」と等価視した、あるいは遠回しの表現（「投げ矢のように」）に託した身体の特徴を露骨に指摘もします。「瘦せすぎています」。これらは、奉公先のお嬢さまの求婚者に恋した下働きの娘——ベタレッジによれば、「お屋敷の使用人のなかでは一番器量が劣り、加えて一方の肩が片方よりも盛り上がっていた」（35）——の嫉妬にかられた妄想あるいは偏見でしかないように思えます。⁸ここでのレイチェル像は歪められているかもしれませんが、しかし、暴言に近いその言葉使いは、あまりにあからさまなためにむしろ、そのような表現を選ぶしかない本人への哀れさを誘うほどなのです。

この手紙が発見されるのは、小説もかなり後半になってからです。フランクリンへの一途な恋心がつづられているだけでなく、事件の真相にも深くかかわるその告白をできるだけ先送りにして、小説が提示する謎への読者の興味を引きつづけるためにです。さらには、その間に、不幸な境遇に生まれ育ったこの娘とその発言に対する弁護側の証言を用意しておくためにです。彼女の第一印象を与えるにあたってベタレッジは、その器量の悪さや不具について細かく言及する代わりに、彼女の保護監察人の意見を紹介しています。「あの娘は、千人に一人ともいえる人物で、今まで、自分は誰か信仰篤いご婦人のお心にかなうと立証する機会がなかっただけなんです」（34）。悲惨で罪深い過去よりも、現在の仕事ぶりにふれてもいます。「身体もとうてい頑丈とはいえず、時おり、すでにふれたような発作に襲われることもあったというのに、あの娘は自分の仕事を黙々と、不平も言わず果たしていった。ていねいな、きちんとした働きぶりだった」（35）。さらにつづけて（たとえそれが、他人を寄せつけない盾だとしても）彼女のように「礼儀正しくて、行儀のよい召使はまず他にいないだろう」（39）。彼女の秘めた恋心に気づいて一度は笑ったベタレッジも、後には、傷心のロザンナの姿を見てつぶやくこととなります。「かわいそうに！かわいそうに！そんな痛みを感じる理由も

ないし、感じる必要もないのであれば、なおさらだ」(154)。ロザンナを笑った父親に、「お父さんて、こんな残酷な人だとは知らなかったわ」(58)ととがめるペネロープであれば、彼女の名誉のためなら、ごひいきのフランクリンを責めるのもいいと云いません。「でもフランクリンさまは、ロザンナなどには何の関心もないと言われたのよ —— それも何とも冷たい口調だよ！」(153)。ロザンナが心を開いた唯一の友、ルーシー・ヨーランドも弁護に熱弁をふるいます。「あの子は不幸な生活をおくってきたんだ。悪い奴らがそそのかして、悪の道へと進ませたんだ —— それでも気立ての優しさは変わらなかった。天使のような人なんだから」(191)。そして「悪い奴ら」以上に、彼女の善意と純真を踏みにじったのはフランクリンだと訴えるのです。「貧しい者が富める者に抗して立ち上がる日は遠くない」(192)というルーシーの叫びは、暴力や流血を招く階級闘争の標語の先取りと読める以前に、何よりも、失意の内に命を絶った友を悼む、彼女なりの精一杯の表現なのです。社交辞礼にすぎないとしても、でなければ証言を引き出すための職業上の懐柔策だとしても、失踪したロザンナの行方を追うカフ部長刑事までも、生きている彼女を最後に見たルーシーの母親に告げています。「私個人としては、ロザンナ・スピアマンの幸せを願ってやみません」(135)。「美しいといえるところなど彼女には何一つなかった」(34)と断言したはずのベタレッジも、ロザンナの「きれいな褐色の目」(37)や、フランクリンの姿をはじめ目にした彼女の「顔色が美しく紅潮する」(39)一瞬に言及してもいます。さらにつけ加えて、「器量のよくない娘ではあったが、わずかに小間使らしからぬところがあった。どこか気品さえ感じられた」(35)。

一方には、華美な衣装で着飾った、きれいとはいえ高慢でわがままなお嬢さま、もう一方には、粗末な服で包んだその姿形はその服と同様だけれど、どこか高貴な雰囲気をもたせ下働きの娘。この構図には、両者の変身、あるいは立場の逆転が約束される、おとぎ話でおなじみの原形がうかがえます。「お嬢さまに召使のお仕着せを着けさせ、装飾品など取り去ってしまったら」と仮定するロザンナ本人が、そのような展開を期待しているふしがあ

ります。さらに彼女は、自分の恋と恋人を、夢見心地に、童話の文脈のなかで語りもするのです。「あなたはおとぎ話の王子さまのようでした。夢のなかに現れる理想の恋人そのままでした。あなたこそ、私が誰よりもお慕いましたお方でした」(318)。おとぎ話風な180度の変転の例なら、作者の他の小説にもいくつか見られます。『名さえなく』でのマグダレインのように、お嬢さまが(意図してであれ)小間使に身を落とすなら、逆に『夫妻』でのアン・シルヴェスターのように、家庭教師が令夫人に変身もします。探偵こそが犯人だった、しかし彼はむしろ被害者であり、被害者と思われたもう一人の人物こそ真犯人だと判明する——このような逆転に次ぐ逆転が事件の核心に仕掛けられている物語は、事件の周辺にも、もう一つの逆転を期待させます。フランクリンこそ宝石泥棒だと気づいたロザンナが、「あなたがご自分の方から私のいるところまで降りてきてくださった」(323)と思うときには特にです。しかし、レイチェルと同様に、彼女も窃盗犯としてのフランクリンについて誤解しています。そして恋人としてのフランクリンについても。「あなたはおとぎ話の王子さまのようでした」——これほどまでの表現は、そこに託された恋心が、逆に、後戻りもできない、かといって進みもできない、行き場のない情熱にしかならないと暗示する以上にほとんど意味をもちません。働き者で、礼儀正しい、あるいは気品がある、あるいは「天使のよう」——これらはしかし、そうである彼女に何の報酬も約束してはいません。ひたすら彼女ロザンナ・スピアマンという存在の哀切さを倍加するばかりなのです。その哀切さこそが、ベタレッジに彼女を美しいと思わせもするのです。恋敵レイチェルの容貌、容姿についての描写から突き出る彼女の激しい嫉妬心の裏に見てとれるものこそ、その哀切さなのです。

レイチェルとロザンナ——たがいに遠くかけ離れたこの二人にも、いくつか重なり合う部分が見られます。「粗野」のなかにも「洗練」をちらつかせるロザンナ、「粗野」が「洗練」を裏切りもするレイチェル。この二人は同じ一人の男を愛し、前者がその現場を目撃するなら、後者はその証拠をつかむことで、ともに彼の犯罪を知ります。両者はともにその事実を誰にも打

ち明けないまま、同じ日に、犯行現場となったヴェリンダー邸から姿を消します。一人は叔母の居宅へ逃げ場を求め、もう一人は海岸の流砂のなかに死に場所を見つけるのです。優雅な外見とは相容れないまでの激しい、長年仕えてきた老僕さえを当惑させるほどに激しい気性を見せるレイチェル。ロザンナもまた、自ら死を選びとるほどの激情に動かされていきます。なぜ自ら命を絶とうとまでするのか、やはりその老僕を困惑させるまでの激情にです。ただ、ロザンナを包むこむ不幸と悲哀の影は、太陽にも比べられるお嬢さまの明るささえ圧するほど濃くもなるのです。優美で慎み深くあれという令嬢としての条件を棄ててまで我を通そうとする（後にわかるように、実際には、愛情と幸福を犠牲にしてまで自らの信念を貫こうとする）レイチェルは、身分違いの恋に泣くロザンナを哀れと見る同じ人物（ベタレッジ）によって、恥ずかしいかぎりど断罪されてしまうのです。前者が後者の引き立て役に後退するかぎりでは、確かにここでは、令嬢と小間使の娘との立場は入れ代わるのです。「小説の始まりの部分に登場するだけとはいえ、ロザンナはレイチェルよりも鮮明な印象を残す。彼女の熱い恋情のためにでもあり、（埋められていたとはいえ）手紙のなかで自分自身について語ってもいるからだ」⁹

少なくとも自分が目撃した限りでのそれをフランクリンに告げるまで、三重の理由で、事件の真相についてレイチェルの口は閉ざされています。一つには、読者に頁をくる興味を失わせないために、（真犯人をのぞけば）彼女だけが知っている事実を明らかにするのをできるだけ遅らせるという小説自体の要請のためです。「男の行動や態度のままに動かされる犠牲者」の一人レイチェルは、¹⁰ 同時に、小説全体に仕掛けられた語りの構成の犠牲者でもあるのです。複数の語り手がそれぞれの立場から物語を語り継ぐなかで、彼女だけがその一人となる特権を許されていないのです。二つには、彼女が巻きこまれた状況のためにさらに硬直していく彼女自身の性格・気質——「他人に助言を求めず、これからなさろうとすることを前もって話されもしなかった」—— のためにもです。そして三つには、まさに彼女がおちいつている状況、告発すべき相手こそ自分の恋人に他ならない、その真相を明か

すなどできないという苦境のためにです。であれば、その苦境を理解してくれる人物などいるはずありません。「誰か相談相手になってくれる……お方はいないのですか」という顧問弁護士の問いかけには、次のように返すしかありません——「一人もおりません」(279)。どうしてそこまでベタレッジには(そして読者にも)理解できないレイチェルの怒りの発作には、自ら真実を封印しなければならないことへの困惑、いらだち、そして抗議も含まれているとわかるのは、小説の後半以降なのです。¹¹ フランクリンからそうするように請われ、ようやく事件の核心について口を開くときレイチェルが訴えるのは、個人としての、さらには語り手としてのフランクリンへの根深い不信感に他なりません。「あなたを今でも信用していません。……ロザンナ・スピアマンの手紙など信じません。あなたが言われたことなど一言も信じません」(355)。この否定文の強さは、その不信感の裏にある、彼女のもう一つの感情の強さと通じています。後に打ち明けているような、理性・理屈をこえるまでに強い、フランクリンへの恋心とです。

なぜロザンナも、レイチェルも、フランクリンを恋するののか。宝石消失のそれとは異なり、これは、『ムーンストーン』での解けない謎の一つです(ロザンナの手紙の一文を借り、性別を変えて言うなら、「女の人はどんな男性が好きかわかりません」)。恋は盲目であり、狂気の沙汰だからとしても、例えば、『名さえなく』でのマグダレーン・ヴァンストーンがそうしたように、『夫と妻』でのアン・シルヴェスターもそうしたように、一時の情熱と衝動から目が覚めるときが来ることもありません。ロザンナなど、彼の顔や姿を見ないうちから、その声を耳にただけで顔を赤らめてしまうほどです。今まで一度も会ったことのない彼の声を遠くに聞いただけです。もう一人、ベタレッジの娘のベネロープも、ひそかに彼を慕っているようです。「けがらわしくて、ずるい人よ！きらいだわ、フランクリンさまにとって代わろうなんてするのよ！」(75)。ゴドフリーを称賛する父親へのこの反論には、フランクリンへの好意が透いて見えます。当時の正確な日記をつけている彼女の方こそ、事件のいきさつを語るにふさわしいという父親の提案に、日記の

内容など他の人には教えるわけにはいかないと、娘は顔を赤くして拒絶します。一人の男への秘めた思いが、そこに書き留められているからかもしれません。

フランクリン・ブレイクはそれほど魅力あふれる男性なのか。何年かぶりに再会した彼を見て、ベタレッジは落胆を隠していません。「将来は背の高い青年になると思わせたが、期待は裏切られた。小ざれいで、細身で、均整のとれた体つきをしておられたが、中背と呼ぶにも、あと2、3インチは足りなかった」(40)。大柄で、恰幅がよく、血色もよく、髭もきれいに剃り、堂々とした体つきを誇る従兄のゴドフリーに比べる老執事の目には、大人になってお屋敷に戻ってきたフランクリンの姿は何とも貧弱に映ります。頬とあごに伸びた髭も、彼をがっかりさせるだけです(例えば、1897年出版のチャトー・アンド・ウィングス版の本書に添えられた挿画——G.・デュ・モリエとD. A. フレイザーが描くフランクリン・ブレイクも、ロザンナが言うような「王子さま」にはとても見えません)。その容貌について、ルーシー・ヨーランドはさらに直截に言い放ちます。「何でこんな顔に[ロザンナは]魅かれたのか。何でこんな声に心を奪われたのか」(309)。男は外見ではないと譲歩してみても、フランクリンの場合、その言動や人格にも、それらにこそ問題があるのです。平均にも足りない身長は、そのような減点の対象が差し引かれているためかもしれません。特権階級の者たちがおちいりやすいとベタレッジを嘆かせる「怠惰という危険」をフランクリンも、というより彼こそ免れてはいません。外国で教育を受けてきたとはいえ、彼が学んできたのは、ベタレッジに言わせれば、「訳のわからない外国語のおしゃべり」(55)でしかありません。他者の(例えばロザンナの)自分に対する振る舞いの意味をくみとる目ももちません。他者に対して(例えばキャンディ医師に対して)自分の行動がどんな意味をもつのかについても考えが及びません。レイチェルの誕生日を祝う席でのキャンディ氏への軽はずみな言動こそが、後に自分の身にだけでなく、他の者たちにも災厄をもたらすのです。今なお借金をかかえている事実はレイチェルにも、ロザンナにも、クラック嬢にも

知られています。女性関係にも慎重さを欠いてます。遊学先で「名をあげては世間体の悪いある女性」(29)と浅からぬ関係にあったとベタレッジは報告しています。レイチェルを評して「これほどに徹底した自立心は、男子にあっては大いに褒めるべき美德である」のだがと惜しむ弁護士ブラフの発言は、フランクリンへのあてつけにも聞こえます。外見は大いに異なるとはいえ、フランクリンはあの浪費家にして、漁色家にして、偽善者のゴドフリーと血を分けた従兄弟だとやはり認めざるをえなくなります。そのゴドフリーをブラフは「口先のうまい詐欺師」(276)とも、「卑劣な偽善者」(280)とも呼んでばかりません。これを復誦し、増幅もして、レイチェルはフランクリンを糾弾するのです。「この悪人、なんて卑劣で、卑劣で、卑劣な悪人」(352)。ブラフの評言にあるように「寛大すぎるほど寛大である」彼女なら、財政上の危機を脱するためという動機であれば、彼が宝石を奪いとったことにも、最大限の譲歩を与えられるかもしれません。レイチェルにとって許しがたいのは、それを盗んだ後で、犯罪の隠蔽工作として、自から警察を呼び入れ、邸内を搜索させるような彼の偽善性なのです。この件ではレイチェルは誤解しています。だとしても、彼の日頃の言動には、そのような誤解を与える素地があることは否定できないのです。

その告白のなかでロザンナは、理想の恋人への恋情をつづるのと同じほど、彼の冷淡さをなじり、問いただしもしています。「それでもあなたは、近づいてはくれませんでした——冷たい距離を保たれたままだったのです」(324)。フランクリン・ブレイクは意図してロザンナを避けているわけではありません。避けるどころか、彼女からの恋文について次のような註釈をつけ加えているように、はじめから眼中にないのです。「この手紙の送り主は、哀れにもまったく誤解している。彼女のことなど、私ははじめから気づいていなかったのだ」(329)。「本当に驚いたし、かつ正直なところ、心から痛ましいと思いながら」(322)もフランクリンは、その手紙を読み終えてはいません。書き手の熱い思慕の情にだけでなく、宝石盗難事件の核心にもふれている残りの3分の2ほどは、ベタレッジが一人で黙読するにまかせてしまい

ます。彼が表現する「痛ましい」思いとは、できるなら感じたくはない、そうする義務もない苦痛を感じなければならない自分自身への憐憫にすぎないのです。読み終えたベタレッジも、一連の事件が解決を見るまで、手紙のその先は読まずにおくよう忠告します（いたずらに感情におぼれるのをいとう彼ならではの助言です）。「いつだって、お読みになればお心が痛むにきまっています。ならば今は読まれるのはおやめください」（334）。忠告はすぐにも受け入れられます。ロザンナの必死の訴えは、ここでも相手に届かないままなのです。「ロザンナとフランクリンとの間に意思疎通が成り立たないことは、労働者階級の者たちなど、彼らが仕えている階級の者たちにとって、いかに見えていないに等しい存在であることを示している」と同時に、¹² フランクリン一個人の性格にかかわる問題でもあるのです。「いかにも彼ならではの対応をみせる」この場面を「小説のなかで最も不愉快な挿話」とする評者もいます。¹³ 「ロザンナが自分に愛情を寄せているという事実を受け入れられない彼に対して、読者は憤慨するし、またそうするように意図されている」。¹⁴ 元の原稿でよりも、出版された現行のテキストでは「ブレイクの洞察力は狭まり、より人情の機微にうとい、好感度の低い人物に仕立てられていて、ロザンナのような女性でも、自分を慕い、レイチェルに嫉妬心を燃やすことができる」と知ったときの彼の驚きがそれだけ際立つことになる。『紳士』の心情では、召使など——とくに器量の悪い、不具の召使など、自分たちと同じ種族に属しているとは考えられないのだ」。¹⁵ 「同じ種族に属しているなどとは考えられない」だけではなく、次の発言では、自分とは同じ時空さえ共有していないと言いたげです。「ふと見上げると、すぐ側にロザンナ・スピアマンが立っていた——まるで幽霊のようだった！」（147）（後に、海岸の流砂のなかに隠された彼女の遺品を捜すフランクリンの前に、ロザンナはまさに幽霊となって現れます。「今は亡いその女が、自死したこの場所に現れて、私の探索に手を貸すという恐ろしい幻覚にとらわれた」（313））。

ロザンナ・スピアマンを形容して「幽霊のよう」と直喩を使うフランクリンは、彼女と同じように身体に障害を負い、同じように労働者階級の娘であ

るルーシー・ヨーランドを評しては「亡霊」という隠喩を使います。ヴェリ
ンダー家の下働きの娘のような、彼から見れば、存在しないに等しい者を表
すのではなく、まわりつくようなその存在を意識せざるをえない恐怖が強
調されているのです。しかしそう映るのはフランクリンにだけです。ルーシー
の障害や粗末な身なりは、彼女の不快な印象を増すのではなく、むしろ彼女
の容貌を際立たせています。自分の好みの体型からはほど遠いとしても、お
嬢さまにそうしたよりも率直で気どりのない評言を選んで、この漁師の娘の
面立ちにベタレッジは賛辞を与えています。「この娘にはどこか男の目を喜
ばせるところがあつた。黒い瞳に細面の、利発そうな顔立ち、きれいに澄ん
だ声、そして髪は美しい亜麻色だつた」(190)。お嬢さまのそれについては
言及もしなかつた声の良さにふれ、お嬢さまの髪には使わなかつた形容詞—
「美しい」を捧げるのも惜しみません(ロザンナとレイチェルとのそれでの
ように、ルーシーとレイチェルとの比較でも、後者の分は決してよくはあり
ません)。レイチェルの魅力について「見る目のある男性なら」という条件
がつけられるのなら、見る目のあるなしにかかわらず、条件なしに「男の目
を喜ばせる」のがルーシーなのです。その男の一人フランクリンが彼女に引
き寄せられるのは、しかし、その美貌のためではありません。彼の目に映る
のは、髪だけを除けば、ベタレッジが描写した娘と同一人物とは思えません。

台所の暗がりから亡霊が現れ、こちらに向かつてきた。血色の悪い、粗
野で、痩せこけた娘が、髪だけは際立って美しかったが、目をぎらぎら
させてこちらを見すえていた。……私の注意力は、娘の松葉杖が床をた
たく音を追うことに奪われてしまつていた。コツコツと階段を昇り、コ
ツコツと頭上の部屋を横切り、コツコツと今度は階段を降りてくる —
すると、その亡霊は、開いた扉のところに立ち、手紙をもつた手をさし
上げて、外へ出てこいと私を差し招いた！(308)

確かにこのルーシーには、ロザンナの恨みや無念の思いがとりついている

とも見えます。その手に握られているのは、死者からの便り——ロザンナがこの友人に託した、フランクリンへの手紙なのです。しかしここでルーシーを「亡霊」とフランクリンに思わせるのは、彼本人の内にある、身障者の姿や行動に人間らしさの欠如を見るような蔑視と偏見、そしてそれらの蔑視と偏見がかきたてる不安と恐れに他なりません。ロザンナに向けたのと同じ階級差別にもかられて、さらには、自分にそそがれる彼女の視線にこめられた「何とも激しい憎悪と嫌悪感」(同)への返礼としても、ルーシーの振る舞いを次のように結論づけるしか、彼にはできないのです。「気が狂っているとしか思えなかった」(309)。

ベタレッジの目に映るレイチェルがそうであるように、フランクリンは欠点の目立つ、育ちのよさのためになおさら目立つ人物です。レイチェルとは違い、語り手となる特権をもつ彼であれば、自らの人格や言動への批判に対して申し開きする機会が与えられてはいます。それでも彼は、自分の性格は矯正などできないし、行いを改めるつもりもないと言いたげなのです。「何事でも、腰をすえてやるということが僕にはできないんだ」(41)。彼のそれは、欠点というよりも、まだ25歳の青年の、成熟への成長過程での一段階とするべきかもしれません。宝石の行方を追う彼の搜索は、自分自身こそ窃盗犯だったという発見がその果てに待ちかまえているからには、自己を探し求める搜索の比喩にもなるはずです。しかし、「煽情小説や推理小説においては、「悪」という難解で手強い問題が、一個人の次元での解決可能な問題にまで格下げされているのであれば、自己探求もいわば短絡化されてしまう」実例の一つに彼はとどまる他はありません。¹⁶「愛すべき」とはやはり言えない側面にもかかわらず、読者も理解に苦しむほどの引力——それに反応した者に、愛と呼ぶしかない感情を催させる力を周囲に及ぼしつづけるフランクリンという存在は、この小説でのもう一つの解けない謎なのです。

キャンディ医師の弟子であり、語り手の一人として物語の進行にも加わるエズラ・ジェニングスも、フランクリンのなかに欠点と名づけられるものを探せないでいます。探せないどころか、その早すぎる死の時まで、前者にとっ

て後者は好意と信頼の対象でありつづけるのです（反対に、ベタレッジによれば、「われわれの誰一人として、彼〔エズラ〕に好意を寄せなかったし、信頼もしていなかった」（155）。「機械仕掛けの神」—— 突然に、どこからともなく舞台上に現れては、行きづまった状況に一気に解決と救いを与える人物 —— として、小説の3分1後半になってはじめて焦点が合わされる（名前だけは、話のついでにすでに紹介されていますが）エズラも、自らの病苦と労苦を鎮めるのに、阿片の他に頼れるすべはありません。もし彼と出会わなかったなら、暗いままで終わっただろう彼の早すぎる晩年の一時期に、暖かい光を投げかけるのがフランクリンなのです。「フランクリン・ブレイク氏のおかげで……何日か、幸福な日々に恵まれたのだ」（460）。逆に、もしエズラと知り合うことがなかったなら、フランクリンに救いが訪れることもなかったのです。他のほとんどの人が目をそむけるその特異な容貌に当惑しながらも、この医者が発する魔力に彼は言及しています。「エズラ・ジェニングスが何か明状しがたい力を私に及ぼし、抗うなどできないと悟ったことは否定できない」（369）。発作を静めるのにエズラが用いざるをえない麻薬 —— 「あの万能で、慈悲深い薬」（380）のような力を本人自身がふるうのです。彼の異相は魔術師のそれを思わせませす。実際に彼は、脈絡のない言葉の連なりの断片から意味を引き出し（病床にある恩師キャンディ医師のうわごとを解読する）、過去をよみがえらせ（一年前の宝石盗難事件の現場を再現する）、その仲が修復不可能と思われた恋人たちを再び結びつけもします。彼こそが、事件の真相を、そしてレイチェルの胸の内の真相をも、「魔術」のように明らかにしていくのです。

他のどの語り手よりも、恋人のフランクリンよりも、エズラはレイチェルを高く褒め讃えます。その美貌についてだけでなく、他の語り手たちがふれなかった一面 —— 「優しさ」も含めてです。それぞれ、社会から疎外され、病苦を負い、尋常ではない肉体上の特徴のために周囲からいとわれる身でありながら、ロザンナとエズラの二人は、レイチェルへの視線についてだけは両極端に分かれるのです。「私の醜い、しわだらけの顔を彼女は見つめたが、

そこには、他人との付き合いのなかでかつて経験したことの無い、まぶしいまでの感謝の念がこめられていたので、どう応じていいものか迷ってしまった。彼女の優しさと美しさに対して、何の心構えもできていなかったのだ」(415)。「優しさと美しさ」とは、今まで並べて彼女について語られなかった二つの美点です。その両方に飢えていた彼の視線を通して、「美女」へ向けられた「野獣」の目を通して、ベタレッジ、クラック、あるいはロザンナが、さらにはフランクリンさえも指摘しなかったレイチェルの美しさの一面を読者は知ることになるのです。一人の青年への愛情に何のとまどいも迷いもなくなった娘が見せる美しさを。レイチェルが今まで必死に抑えてきたフランクリンへの思いもエズラは解き放ちます。「あの人のことをずっと愛していました。今も愛しています。あの人のことをひどく誤解していたときでさえ、あの人に何とも冷たい、何とも酷い言葉を投げつけたときでさえ、愛していたのです」(同)。分別、理屈をこえた情動こそ恋心なのだ彼女も認めなければならなくなる瞬間です。それは、なぜあのようなフランクリンにそれほどまでにと、あらためて読者が当惑させられるときでもあるのです。エズラの尽力で、盗難事件当夜のフランクリンの行動が再現され、レイチェルの誤解も解けます。その後、薬の作用で眠りつづける彼に付き添うまま、レイチェルは朝を迎えます。

戻ってみると、彼女はソファ― [に眠るフランクリン] の枕許にいた。ちょうど、彼の額に口づけをしているところだった。……ふり返り、明るい微笑を見せたその顔色は輝いていた。「私の立場でしたなら、あなたも同じことをされたはずですわ」と彼女はささやくのだった。(430)

今の彼女のような立場になるなど、「(こんな私にも、かつて一度だけ、愛情深くそそがれたやさしい眼差しを思い出」(429) せるとしても) これからはまずないだろうこの医師に向けるには、レイチェルのささやきは少し残酷にも響きます。それに気づかないほどに、ようやく訪れた和解と平穩に酔う

彼女なのです。王子さまの口づけでお姫さまが目覚ます「眠り姫」での性別を逆にしたこの構図のなかでは、目覚めているレイチェルと眠る恋人との立場も入れ替わっています。フランクリンの犯罪と偽善とをきびしくたたくて徹底抗戦の構えを見せていた彼女が、無条件降伏をしたかのように、かつての敵に今はかしづいているのです。

このようなレイチェルは、エズラの目にそう映るほど美しいのか。怒りと悲しみ、屈辱と絶望とを通り抜け、ついに忍耐が報われる彼女を見るのは（たとえそれが予想できるとしても）、この小説の読者の大きな喜びです（予想が裏切られない喜びも含めて）。しかしそれと引き換えに、ブラフがそう表現する「彼女の美德の一つである」自主・独立の精神が失われるのは、そしてそれが他の誰でもない、フランクリンのような男のためにであればなおさら、若干の割り切れなさを残しもするのです。謎や問題——読者を引きつけ、読ませつづける力をもってきた謎や問題が解決されると同時に、それらの中心にいたレイチェルの魅力も薄れていく、として言い過ぎなら、少なくとも変質していくのではないか。「煽情小説、そしてその後を継いだ推理小説には、謎が一掃されれば終わりを迎える、つまり謎は究極的には謎などではないという結論にいたるという逆説がある」なら、¹⁷ 事件の解決を知り、恋の成就に満ち足りた彼女には、その事件が引き起こした愛憎の葛藤に悩む彼女をつつんでいた陰影が消えています。例えば、紛失した宝石の捜索が行きづまるなか、警察の疑惑の目を背後に、ヨークシャーのヴェリンダー家の屋敷を離れる場面での彼女に見られるような陰影がです。

ほどなくレイチェルさまが階段を降りてこられた。胴回りを細く絞った、黒い髪、黒い瞳を引き立てる、淡い黄色の服を見事に着こなされていた。白いヴェイル付きの小粋な麦わら帽子をかぶられ、お手にびったりと合った、薄桃色の手袋をされていた。帽子からのぞく黒髪はサテンのようになめらかで、桜貝のような小さなお耳には、これまた小さな真珠の耳飾りをされていた。こちらに小走りにやってこられるお姿は、茎を伸ばし

て花を咲かせる百合のように、背筋が伸び、その動きは子猫のようにしなやかで、柔軟だった。いつもに変わらぬきれいな顔立ちだったが、お目とお口だけは別だった。眼差しには、美しいというよりも異様なまでに強い輝きがあり、唇はほとんど色を失い、かたく結ばれて、いつものお嬢さまらしくもない。いきなり、そして一瞬、お母さまの頬に口づけされた。「お許してになってね」とおっしゃった——そして、顔の前に引きちぎらんばかりにヴェイルを下ろされた。と思うとすぐさま階段を降りきり、隠れ家に逃げこむかのように、馬車のなかへと飛びこまれてしまった。(158-9)

一方で目立つのは、18歳になって間もない令嬢ならではのたおやかさです。「お手にぴったりと合った」手袋の典雅さ、「サテンのようになめらか」な黒髪繊細さ、身をおおう淡い色調の爽やかさと優しさ。他方で目を引くのは、それらとは相容れない、「胴回りを細く絞った」裁断の服に託されている、今このとき、あえて母親の庇護のもとを離れていこうとする決意の強さ、息苦しいまでの強さです。自分の髪や目の色合いに映える色彩の服を選んだ自意識の確かさ、そのような服を着こなせる特権＝若さへの自負も見てとれます。ヴェリンダー家の令嬢は美しいのか。少なくとも、当の本人は自らの容姿の美点を自覚していると、この場面は教えてくれます。そして本人は自覚していないだろうけれど、この場面をおおう緊迫感（カフ部長刑事配下の者がひそかに馬車を尾行しようとしています）と不安感（「空は雲行きがまだあやしかった」(158)）がさらに彼女を引き立たせる背景にもなります。上の引用の前半が、冒頭に引用した同じ語り手による描写と同じく、レイチェルの肖像画を描いているのなら、彼女が走り出してからの後半は、映画の一カットにもたとえられます。被写体レイチェルは、カメラ位置に立つ語り手に素早く近づき、目の光や唇の色合いがわかるまで接写されたかと思うと（すでに、小さな耳につけられた小さな耳飾りが望遠レンズでとらえられています）、また素早く離れていきます。その短い間に加速していく、彼女

の優雅な姿勢の硬直したそれへの、軽やかな動きの乱暴なまでのそれへの変化こそが強調されているのです。

尋常ではない、しかし毅然とした令嬢の物腰に気圧されたかのように、この場面でのベタレッジは批判めいた物言いを控えています。自分の目を通してよりも、読者に直接お嬢さまの姿に注目させているかのようです。その一方で、いくつかの相容れない形容詞が入り交じる観察——その行動は「しなやかで、柔軟」であるのに、目は「異様なまでに強い輝き」を見せ、「唇はほとんど色を失い、かたく結ばれて」います——は、読者を混乱させもします。その混乱こそ（語り手本人はそうと意識してはいないとしても）、彼女の個性、ひいては魅力とかかわるのではないか。常に変わらないお嬢さまと日頃に似ないお嬢さま、しなやかさと硬さ、優美と粗暴——ヴェリンダー家の執事の言葉で言いかえれば、彼女の美点と欠点。これらの混交こそ、少女と女性の狭間でゆれ、愛情と憎悪の谷間にさまよう迷子レイチェル・ヴェリンダーならではの魅力ではないのか。少なくとも、事件以前のレイチェル——宝石を贈られてはしゃぐ彼女、それを自慢気に胸元に飾る彼女にはない美しさが見てとれはしないか。あるいは事件以後のレイチェル——恋人に寄り添い、何の疑いもなく身をゆだねる彼女よりも深い美しさが感じとれないか。奉公先のお嬢さまについて、ベタレッジは次のような総合評価を下します。「レイチェルさまは、いろいろな欠点はおありだろうが、この老僕がお仕えし、いつくしみ申しあげたどなたよりも、愛らしく、おきれいで、素晴らしいご令嬢であった」（143）。「いろいろな欠点」と70歳をすぎた使用人が判断して疑わないものこそが、成人を迎えたばかりのお嬢さまの魅力を際立たせているのではないか。「愛らしく、おきれいで、素晴らしい」という、曖昧にすぎてほとんど何も語ってくれないような形容詞ばかり連ねても計りきれないその魅力を。そのような形容をあえて並べるベタレッジは、しかし、レイチェルの魅力とその微妙さについても、読者自らが思いめぐらすように誘いかけているのかもしれませんが——彼女の内心についてそうしたように。「お嬢さまについて存じあげている事々をご紹介しますとしよう。そ

うしておいて、お嬢さまのお心の内の探究は読者の方々にお任せしょう——もしおできになればだが」。

註

1. 以下、『ムーンストーン』からの引用は次により、以後、頁数はカッコに入れて示す。Wilkie Collins, *The Moonstone* (Harmondsworth : Penguin Classics, 1999). pp. 64-65.
2. *Man and Wife* (Oxford : Oxford World's Classics, 1995), p. 334.
3. Unsigned review, rpt. in *Wilkie Collins : The Critical Heritage* Norman Page ed. (London, 1974), pp. 172-173 ; originally published in *Spectator*, 25 July 1868, xli, 881-2.
4. この二人の視線については、拙論『フォスコはなぜ太っているのか』（白鷗女子短大論集 第24巻、第2号、1999）、pp. 171-199を参照。
5. Georg Simmel, “The Adventure” in *Georg Simmel : On Individuality and Social Forms : Selected Writings*, trans. and ed. Donald N. Levine (Chicago, 1971), p. 187.
6. いくつかそこから想を得た部分が『ムーンストーン』にあるとされるコンスタンス・ケント事件、あるいはロードヒル事件は、1860年6月30日の早朝、裕福な中産階級のケント家の一人息子、当時4歳のフランシスの殺害死体が発見されたことから始まる。やがて被告席に立たされた、被害者とは母親違いの16歳の姉コンスタンスは、レイチェルにも似通う独立心の強い性格が犯行に与かったと非難されたという。例えば、Elizabeth Rose Gruner, “Family Secrets and the Mysteries of *The Moonstone*”, *Victorian Literature and Culture*, 21 (1991), pp. 127-145 を参照。
7. そしてまた、「……少なくとも、自己欺瞞を習性とする老嬢という姿を自ら描写しているという点でなら、クラックの言葉使いは、疑いもなく真実なのだ」(D. A. Miller “From roman policier to *roman-police*: Wilkie Collins's *The Moonstone*”, *Novel*, 13 (1979-1980), pp. 153-70)。

8. レイチェルの体つきについてより「正確な観察」してくれるだろう、お嬢さま付きの小間使ベネロープの報告は紹介されていない。彼女は「『ムーンストーン』のなかで沈黙する女性たちの一人なのだ」(Gruner, *ibid.*)。
9. Sandra Kemp, “Introduction” to *The Moonstone* (Harmondsworth), pp. vii-xxxiv.
10. Catherine Peters *The King of Inventors: A Life of Wilkie Collins* (London, 1991), p. 305.
11. 「宝石ムーンストーンをレイチェルの処女性の象徴と見るのが、コリンズのこの作品の批評での常道になっている」(Gruner, *ibid.*) のであれば、「ブレイクと疎遠になっていた間、彼女が沈黙を守るのは、そして逆にヒステリックに言葉を爆発させるのもまた、そのように離れて会えないでいることへの性的な欲求不満を暗示している」とする見方をもあるだろう (Tamar Heller, “Blank Spaces: Ideological Tensions and the Detective Work of *The Moonstone*”, *Wilkie Collins: Contemporary Critical Essays*, ed. Lyn Pykett (London, 1998), pp. 244–264)。
12. Heller, *ibid.*
13. Peters, *ibid.*, p. 130.
14. *ibid.*
15. *ibid.*
16. Patrick Brantlinger, “What Is ‘Sensational’ about the ‘Sensational Novel’”, *Nineteenth-Century Fiction*, 37(1982), pp. 1–28.
17. *Ibid.*

第一次、第二次資料ともに、英語原文からの和訳は、すべて筆者訳による。